

哲學研究

第百十三號

第十卷
第八冊

呪術の發生に關する問題

宇野圓空

一、呪術儀禮論の發展

往年本誌上で私が呪術に於ける合理性について論じたのは、今から五年ばかり前になるが、それは未開人にも自然的因果の觀念と超自然的な因果とがあつて呪術や宗教は後者を基礎とするものであるといふのが主なる論旨であつた。ところでこれは原始的な呪術の心理學的性質の特徴を指摘するのが目的であつたから、主としてその意識状態や觀念内容を説いたのであるが、これを呪術發生の問題として考察するならば、自らその立場が變つて來る。即ちこの場合にはむしろ呪術の行爲形式とその非論理的な方面を顧みなければならず、また所謂原始人の二分主義的世界觀

も、さらにその起源に溯つて現存の未開人に於けるそれと大いに趣を異にすることを想定する必要がある。そこでこんどは發生的の見方からして呪術をどんなに取扱ふべきかを考へて見よう。

マレットが雑誌 *Folklore* に『呪文より祈禱へ』の一論文を發表したのは一九〇四年である。これより先き一九〇〇年彼は同誌に寄せた『ブレアニミズムの宗教』に於てアニミズムの成立を考察して、マナ・タブ型の神祕的な觀念又は感情が其根源であることを説いたが、前者に至つては更にこれらの呪術宗教的觀念若くは感情の前に、その行爲儀禮が成立することを想定した。即ち原型的な呪術 *rudimentary magic* は感情や意志の衝動的な表出運動であつて、其客觀的投射性 *projectiveness* から目的や效果の觀念が現はれ、強作的信念 *make believe* がこれを支持し、それからマナ等の神祕力の觀念がむしろ其效果の説明として發生する。フレザーなどのいふやうな呪術的因果の原理は多くは後からの説明であり、呪術としては大體上半ば本能的な實行が遙か前に發生したといふのである。

またプロイスは一九〇四年から翌年に亙つて *Globus* 誌上に『宗教と藝術の起源』を書き、マレットと同様な説を一層力強く論じた。プロイスもマナ等の所謂呪力觀

念は呪術の起る原因ではなく、むしろこの結果であり概念化であるとし、瘧病の呪術や戦勝狩獵等に於ける呪術的な踊りも、本來本能的な手當や衝動的な表出運動から起るといふのである。尤もこれらが動物の生活に於けるやうに、單に本能のみに導かれてゐる間は、それは呪術ではないが、これを自然的な方法と對立せしめて、神祕とか超自然とかいふやうに認め、特別な呪力の觀念が加はるのは遙か後のことであつて、これらの區別を意識しないで單純な繼續的行爲として行つて居る時に、既にそこに呪術の發生がある。即ち呪術の發生は呪術觀念の成立より前に之を認めなければならぬのであつて、呪術の起源としては呪術觀念を豫想しない呪術行爲その物の發生が重要な問題だといふのがプロイスの意見である。

一九〇六年の *Archiv für Religionswissenschaft* に書いた『*自然人の宗教*』に於ても、プロイスは再び如上の意見を發表し、マレットの論文を批評して更に之を明確にしやうとしたが、其年ハートランドも *Anthropological Section of the British Association for the Advancement of Science* の座長講演に於て、(註)略同様な見方を發表した。即ちハートランドに取つても呪術や宗教の儀禮は信念の發生に先立つのであつて、儀禮は神祕力の觀念や效果の信念から生ずるのではなく、戦争や狩獵に際しての踊戀や怨の呪法の起源を

考へると、それは肉體的神經的反應の衝動から自發的自動的に出たものであつて、それに伴ふ強い感情がさらに集合的に強められて、その主觀的效果がやがて客觀的效果の信念となり、且つそれが繰返しによつて習慣として確立すると、これに種々の意味と説明が加へられ、終に神祕力の觀念をも生ずるのである。

(註) この講演は一ナ〇八年オクスフォードの第三回萬國宗教史大會に於ける座長講演を合せて「宗教と呪術の關係」と題し、その著 Rinal and Dalief, Studies in the History of Religion, London, 1914 の卷首に載つてゐる。

次で翌一九〇七年 Globus 誌上に現はれたフイーヤカントの論文『宗教と呪術の起源』は一層明確に儀禮が呪術的觀念の前に成立する所以を説明した。フイーヤカントによると原始の呪術には明白な原因結果の觀念がなく、自然的な效果と呪術の働きとの對立なども考へられて居ないので、呪術はまづ感動行爲 *Affecthandlung* として起つて、後に結果が意識され、又これを目的觀念として行ふやうになり、やがて類比呪術 *Analogiezauber* が生ずるのである。

此點はキングの『宗教の發達』一九一〇年に至つて一層明瞭に且つ詳細に説明された。キングは呪術や宗教の起源をその觀念的基礎に求めないで、まづ其儀禮の成立にあることを主張し、此等の儀禮は最初は多く考へられるやうな目的行爲ではな

く、價值的態度として現はれ、主として實際的活動でない感情的な隨伴活動 *accessory activity* が、習慣と情性によつて社會的價値となり、やがて神祕的な力の觀念などが説明的にこれに附加はるゝを説明した。キングが之を以て單に呪術の發生ばかりでなく、特に宗教儀禮の意義を明かにし得るものとし、そこに大に社會學的な考察を加へたことは、この學說の發展に多少新たな基礎を與へたものと云ひ得るが、同年マレットは其オクスフォード大學社會人類學の開講々演である『卑下の發生』に於て、原始人は宗教を『考へ出す』*reason out* のでなく、『踊り出す』*dance out* のだといつて、それより廿餘年前夙にロバートソン・スミスが主張した研究方法上の意見 (*Robutson Smith, The Religion of the Semites, 1889*) を引用し、觀念よりも儀禮の成立が先であること力説して居る。同時にプロイスもまた此年の *Archiv für Religionswissenschaft* に於ける『自然人の宗教』で、上記のフリーアカントの所説を委しく批評し、本能行爲や感動行爲が呪術の根源であるが、それが呪術となるのには意志の力が與ふことを認めなければならぬと説いた。

かくて呪術や宗教に於ける儀禮先行論呪術儀禮の衝動起源論ともいふべき此種の主張は、種々の方面から漸次其内容が整頓されて各學者の間に多少其論點の差は

ありながら、一學說としての形を成し、歐米の學界に一つの流を作つた。而して一方ではこれに對する反對や攻撃も相當にあつたが、其後此說の内容は益々補足されて、可なり力強いものとなつて來て居る。フカールは古代エジプトの呪術の考察から、原始の呪術は一種の經驗的行爲であつて、神祕的な力の觀念や、自然超自然等の區別も意識されて居ないと主張した。(Foucault, *Histoire des religions et méthode comparative*, Paris, 1912)ヘートはマレットからプロイス、フイーアカント、キングの説を取入れて更に之を整頓し、種々の呪術形式の根源を他の目的行爲や、觀念運動其他本能的衝動的な模倣表現等に求め、これらの『先呪術的』(primärgisch)の行爲が習慣となつてそれに呪術的觀念が付加はり、神祕的な力の觀念の發生する過程を最も周到に考察した。(Beth, *Religion und Magie bei der Naturvölkern*, Leipzig, 1914)プロイスはまたその *Die geistige Kultur der Naturvölker*, Leipzig, 1914 に於て、先の所説の立場を一層簡明に説明し、マレットも一九一五年公にされた *Hastings's Encyclopaedia of Religion and Ethics* 第八卷の *magic* の項に於て、衝動的行爲や模倣行爲が呪術の根源となる所以を詳説した。マレットを繼承して、儀禮の先在を説き、呪術の起源を表出運動や表現儀禮に在りとしたものには H. O. James, *Primitive Ritual and Belief*, London, 1917 があるが、シライターもまた因果觀念の發生

を論じて、原始の呪術には明白な mechanism の觀念がないこと、神秘力や放射性感應等以後になつて興へられた説明であり、表出運動や模倣行爲に多くの呪術の源があることを考へた。(H. Schleier, Religion and Culture, New York, 1919)なほヘートはその Einführung in die vergleichende Religionsgeschichte, Leipzig, 1920 にも呪術儀禮の根源が多く隨伴的行爲にあることを説き、リードはその The Origin of Man and of his Superstitions, Cambridge, 1921 の呪術論に於て、呪力の信念や呪術的因果は後に加はつたものであり、大體上日常の實際的行爲と同様な心持で、しかも感情的にさし迫つた隨伴的運動が繰返され、一の習慣的形式を成すことが呪術の初めであることを詳説した。さらに最近フイアカントは『原始宗教に於ける神聖』(Die Dioskuren 1922, I, 285—324)に呪術や宗教の主知的目的合理的解釋 intellectualistisch-zweckrationalische Auffassung を厳しく攻撃して、儀禮の方面よりする客觀主義を稱へ、呪術の發生を依然として表出や遊戯の衝動に求めやうとして居る。

(註) 上記の重なる人々の所説は P. W. Schmidt, Der Ursprung der Gottesidee, Münster i. W., 1922 に其梗概をのべて批評を加へてある。特に儀禮の起源の説明についての種々の異説は Pauly-Wissowa, Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft, Stuttgart の ritus の項に總括的に擧げてある。

二、呪術觀念論の意義

それで此等の主張を概括して呪術の起源に關する儀禮先行論といふことが出来るならば、これに對する在來の觀念起源論即ちフイーアカントの所謂主知的目的合理的解釋も、なほ他方で相當に其主張を持して下らない。タイラーや後年のヴントのアニミズムに依る呪術論はしばらく別として、プレーザーやラングが呪術の起源をば誤つた因果觀念と其適用にあるとしたこと、ジェヴランスが之を超自然の觀念の亂用と見たこと、殊にジェー・エチ・キングが神祕的な力の觀念を重要視したことなどは、其後の呪術觀念論の基本的思想として、今に何等かの程度に於て相錯綜して現はれてゐる。即ちデュルケムやユベール及びモースは神聖な神祕力の特殊の轉用が呪術を生ずるとし、レイナク、リユーバ、ゼーデル、グローム等も大體上これに類する説明を與へ、シユミットは因果觀念を基本として特殊の聯想が之に加はることに依つて呪術が生ずるとを力説した。フアングネブとカルツヒどが夫々之れを普偏力の觀念 dynamism と放射性の觀念 Enantismus に歸したのも多少神祕力の觀念を修正したものと見做すことが出来る。而して意志的の衝動的起源をといいたマレットやキ

ングまでが、一方で同時に神秘力觀念の發生を認め、多くの呪術をその觀念で説明したから、アニマチズムを呪術の根源とする考へは一般に甚だ有力であつて、ゴールデンワイザーやロキーなどの超自然説やクレメンの呪力論となつて現はれ、^(註)それらは多く、呪術起源の觀念的説明の異つた形式と認められる。

(註) C. Cleman, Wesen und Ursprung der Magie, Archiv für Religionspsychologie, II/III, 108—135.

發達した呪術の基礎觀念の説明として、これらの呪術觀念論が夫々多少の眞理を齎すことは疑はれないが、然しこれを呪術の起源ことにその歴史的發展の説明として見るならば、これらの學説はそれが自任して居るやうな妥當性を持つて居るとは考へられない。蓋し呪術が最初からこんな確定的な觀念を本にして企てられた行爲だとは、人類の他の生活方法や行爲形式の發生と對照しても考へにくいことであつて、要するにこれは發達した呪術に於ける基礎心理の分析からの類推に過ぎない。むしろこれらの呪術觀念は呪術儀禮が成立した後に其理由の知的反省から説明として與へられたと見る儀禮先行論の方が、原始社會に於ける種々なる生活形式の發生に關する事實に基いた確實さを持つて居るやうである。即ちその因果關係の觀念にしたところで、それは一定の呪術的形式が社會的若くは個人的の習慣とな

つて行はれ、それに效果の信念が現はれてから後のことであつて、其行爲と效果又は手段と目的との連絡の上に生ずる觀念である。それは日常の行爲に於ても特殊の呪術的な行爲に於ても同様であつて、この反省が生ずるには人類に相當な知的能力の發展を豫想せねばならず、それまでにすでに日常生活の爲にも、又衝動的な生活からも、所謂呪術的な行爲形式が發生して居つたことは勿論である。

而して呪術行爲の因果を特に超自然と認めるが如きは、これを日常生活に於ける普通の行爲形式と比較して、特にその差異に注意されるやうになつてからのことであつて、たとひそれが個々の具體的な場合に對する漠然たる感じであるにしても、日常の平凡な行爲に於ける原因結果の關係と、呪術行爲に於けるそれとの對照が注意されなければ、生じ得ない感じがある。(Jonghi, *Leconce sociologie sur l'ivolution des valeurs*, 1922, p. 172) 尤もかゝる觀念又は感じは自然現象や他人の行爲の客觀的觀察から、平常と非常、普通と特別等の對立によつても生じ得るが、この場合にも呪術が此觀念に基いての企てゝあるには可なりの知能を要するのであつて、むしろ既成の呪術儀禮が此觀念で説明されたとする方が自然である。

神祕的な方の觀念に至つては、この超自然性の具體的投射であつて、かゝる觀念は

個々の場合に於ける具體的な超自然の觀念即ち驚異の感じが、或る程度まで普遍化しなければ生じないのである。もとより人類學的事實が直接に示す諸民族の神祕力の觀念及びそれを云ひ表はす彼等の用語は、近代學者が之を轉用した時のやうに普遍的抽象的な概念ではないが、然し少くとも一般的にこの種の力や性質を云ひ表はす言葉が出来るのは、其内容である超自然性や神祕性が明かに意識され、且つ多くの事例について共通に認められる觀念となつてからのことである。

尤も呪術的儀禮も眞にそれが呪術となつた時の事實について見ると、その多くは何等かの論理又は因果觀念に基いて行はれて居るのであつて、最も原始的な民族の間でも我々の知り得る範圍では精靈や神祕力や又はある超自然の觀念が何等かの程度で其根柢となつて居ることは否定できない。最初に云つた往年の小篇に於て私が呪術に於ける超自然的因果の意識を認めやうとしたのも要するにこの意味に於てはあつて、こゝにいふ靜的な心理學的考察から、多くの呪術觀念論が呪術儀禮の根柢をこれらの觀念に求めるのはむしろ當然のことである。然し呪術の發生を歴史的に或は動的に考察するには、さらに事實の他の方面を顧みなければならぬのであつて、種々なる呪術的觀念の存在が呪術儀禮發生の動機だとは斷言できないのであ

る。勿論呪術發展の過程に於て、可なり多くの呪術儀禮がかゝる呪術觀念を基として特に計劃されたり、またすでに存在する呪術形式から類比的に新に企てられたことは事實として認めなければならぬ。しかしこれらはすでに一方に多數の呪術儀禮とこれに伴ふ觀念が存在してからの發展であつて、根本的の發生ではなく、それらの典型となつた儀禮や觀念の根源はさらに別に考察されねばならぬ。要するに現在の事實の心理的論理的構成を以て、直にその發生を説明しやうとする所に、多くの主知的合理論的解釋の不當な主張と欠陥が存するのであつて、従つてこの點に於ては儀禮先行論の方が確かに一層深い考察と事實に近い結論を齎すものと云はなければならぬ。

三、儀禮論の難點

然し今問題を呪術發生の點に制限したところで、儀禮先行論のすべての論點を無條件に承認することは困難である。即ちそれは觀念論に對して反動的に他の一方の極端に走る傾があるのみならず、なほ呪術の發生に關して幾多の問題を未解決に残して居る。第一にこれらの儀禮先行は多く廣い意味のプレアニミズムを

承認し、呪術觀念が成立したところで、それは普通にアニミズムといはれるやうな靈魂觀念や人格的な力の觀念を中心とするものではなく、非人格的な神祕力の觀念に基くといふのであるが、この神祕力とは非人格的ではあるが、しかも生命の根源となるやうな普遍的な生命力のことであるか、それとも特殊の活動の基礎としての力のことであるか、換言すればそれは嚴密な意味のアニマチズムに於けるやうな生命の觀念であるか、また特にダイナミズムといはれるやうなアナ觀念か、この二種の觀念は屢々ブレアニズムとかアニマチズムといふ名の下に混同されるが、實は一方は普遍的な生活力であり、他は神祕的超自然的な特殊の働きの根本であつて、兩者は大に其性質を異にし、互に區別されねばならぬ。又この種の力の觀念即ち廣い意味で呪力觀念といはれるものは、たとひ物體を離れて存在しないとしても、それはある能動的な力やまた靈質とか生命液といふやうな實質的な存在たることを豫想するのか、また單に效能徳性といふやうな性質屬性に過ぎないのか、これをダイナミズムとかエマニデムとかいふ名で云ひ表はした場合にも、其概念が必ずしも精密に説明されてはゐない。

また呪術に於ける因果觀念は自然的な因果觀念と其性質が異なるか否か、マレット

は其差異を力説し、プロイス等はむしろこれを否定せんとするやうである。更に兩者がその性質を異にするものとして、それらは最初から互に對立して存在したか、何れか一方から他が分れて發展したか、それとも兩者は同時に相分化したと見るべきか、此點についての儀禮先行論者の意見はなほ明瞭を欠くものが多い。それで呪術起源の説明としてはなほ此點に多くの考察を要するのであるが、全體として先在せる呪術儀禮からどうしてかゝる因果觀念や呪力觀念が發生し、またそれがいかにして其儀禮に必然的に伴ふやうになるのか、此點がアレットやプロイス乃至フイーアカント等の説明では必ずしも盡されたとは云へない。

然し儀禮先行論に於て最も明瞭を欠く點であり、且つまた最も根本的な問題であるのは、その所謂基本的儀禮が最初から正當に呪術と認められ得るや否やの疑問である。儀禮先行論の多くは大體に於て衝動的な表出行爲に呪術儀禮の最初の發生を認めるやうである。憤怒の情の表出として對手の持物や像を破壊するとか、敵に向つて槍を振るとかいふ衝動的な行爲が對手を傷け敵を殺す交感的呪術の起源だといふのがマレットの考へである。而してマレットはかゝる衝動的な行爲を『原始的な呪術』rudimentary magic と呼び其意志目的の投射から、強作的信念 make-belief によ

つて其客觀的效果が信せられるやうになつたものを、『發展した呪術』developed magic とするのであるが、其所謂『原型的な呪術』は呪術儀禮の根源ではあつても、それが果して性質上呪術と見做し得べきものであるか否かは、明確に論斷されてゐない。ハートランドも同様に衝動的自發的な行爲が呪術儀禮の根源と見るのであつて、それが慣習となることが儀禮成立の要件であるやうに云つて居り、キングも自發的な行爲や非實際的な隨伴活動が社會的習慣となり社會的價値を持つ時それに效果の信念も加はつて宗教や呪術の儀禮を成すといふのであるが、どちらもその慣習化する以前の行爲が眞に呪術であるかどうかを明かにしてゐない。

プロイスは無目的な模倣や表出行爲、特に本能的な治療行爲 Heilhandlung が呪術行爲の根源だとするのであるが、しかも本能のみでは呪術を成さず、これがある目的行爲となつて始めて類比呪術となるといふ。フィアカントは感情的な表出運動が類比呪術となるには、結果意志が加はらねばならぬとして居るが、それでは、呪術の起源が表出行爲や本能運動にあるといふのは、單にそれらが呪術行爲の形式の根源をなすといふのみであつて、其自身に最初の呪術ではないのであらうか。此點は儀禮の先行を主張し、呪術の起源を呪術觀念の成立前にありとする他の人々に於ても、甚だ

明瞭を欠くのであつて、しかも此系統に屬する學說の主張も、深く其内容に立入つて考へると、吾人必ずしも同一ではなく、互に相當の距離があるやうである。(續く)